第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会

高校生の部　優秀賞　受賞作品

『はじまりは東の空から』

東京都
学習院女子高等科
二年　　山田　璃乃

はじまりは東の空から

学習院女子高等科　二年
山田　璃乃(やまだ　りの)

「私のまち」と聞いて思い浮かぶものはなんだろうか。またそれを思い出すのは、どんな時だろうか。そしてその時、どんな気持ちを抱くだろうか。昔住んでいた家や今住んでいる家、その周辺。家族との思い出、経験。いつも使っている電車の路線マーク。見ると、考えると、思い出すと、ほっとする。どれも、自分の暮らしを思わせる。しかしその中でも私が一番に思い出すのは、昔住んでいた場所なのである。今の自分をつくった、はじまりのまちだ。

「東の空から、おひさまは昇るんだよ。」

その事実をはじめて知ったのは、小学校に入学して間もない頃、最寄り駅に向かう早朝の車の中であった。

私は小学生の頃から電車を使って通学をしている。今年でかれこれ十年目となる。この十年の間、区内ではあるが引っ越しも一度経験した。以前住んでいた家は駅からやや遠い場所にあったこともあり、朝家を出るのは午前六時すぎだった。そこから最寄り駅へと向かうため、母の運転する車に五分ちょっと揺られる。夏は薄明かりを迎えた空からの眩しい朝日を、冬は夜明けを焦らすかのように赤みの差した空を見て、目線の先に朝を感じながら車は駅へと向かう。ある日、目を背けたくなるほど真っ直ぐに差し込む朝日に向かって、母は言った。「おひさまは東の空から昇るんだよ。」と。へぇ、おひさまって東から昇ってるんだ。毎朝向かってる駅って東側にあるんだな。誰も知らないような、いつか忘れてしまいそうな知識よりも、これまでもこの先もずっと変わらない大切なことを教えてもらった感覚。今でこそそれに対してありがたいという気持ちが生まれるが、当時はありがたい云々ではなく、とにかく忘れないでいようと幼いながらの真剣さで応えようとしていた気がする。

それからというもの、あのまちを思い出して最初に回想されるのは、いつだってあの母の言葉なのだ。

ある日の夕方、家族と一緒に行った散歩を思い出してみる。家の周りを少し歩いただけで、何か目的があったのかは正直覚えていない。鮮明に覚えているのは、手を振りたくなるほど遠くにまで伸びた家族四人の影だ。「お昼の太陽よりも夕陽は斜めに差してるから、影は長くなるよね。」と母は言った。当時でさえそれは当たり前の事実と分かっていたが、言われてみればはじめて気にかけたことだった。そんな小さなことも会話にしてくれる私の母らしい一面には、今もほっこりする。

散歩道の途中、必ず目に入るお店があった。以前住んでいたマンションの前の、小さなペットサロンである。そのお店の扉に書かれた「年中無休」という言葉は、私に「年中」が「一年間」という意味を持つのだとはじめて教えてくれたものだ。というのも、当時幼稚園生だった私にとって「年中」という字は、幼稚園の真ん中の学年である〝年中さん〟を表すものでしかなかったのである。ちなみに、意味と一緒に「ねんじゅうむきゅう」と読み方を教えてくれたのも、私の母であった。同じ漢字なのに違う読み方、全く違う意味を持つんだ。あの時の、視野がぐわっと広がったあの感じは一生忘れないと思う。我ながら、当時の着眼点の意外性には驚かされるものだ。

ある朝のゴミ捨て。ゴミ捨て場の前で、「『掃き溜めに鶴』ってことわざ知ってる?」と母

から聞かれたことがあった。その時はじめて聞いたことわざだったが、掃き溜め＝ゴミ捨て場ということをその場で理解したからだろうか、おおかた意味を推測できた嬉しさも、私は今もなお思い出せる。肝心の母は、当時ことわざを教えた事実さえ覚えていないようだったが。昔から何かに付けて言葉について話してくれる母。その姿勢は今もなんら変わらない。

毎朝送り迎えしてもらっていたあの車、あの道。わずか五分ちょっとの会話。数年前に閉じてしまった、年中無休のペットサロン。そして、今はもう別の誰かが住んでいるマンション。時々そこを通り過ぎる度に見える、ベランダにかかった馴染みのない洋服や布団。こうして、過去の私からは「今」だったものを過去だと思わずに、つまり違った角度から見てはじめて、私はあの場所を「私のまち」と認識するのだと思う。今住んでいる場所が本当の意味で「私のまち」になるその時も、きっと今と同じようにそれを噛みしめ抱きしめながら、私は筆を手に取るのだろう。

「私のまち」というのは、自分の住む家の他、近所の人や店、身近にある言葉などあらゆる刺激のある場所、つまり「まち」に、自分という個人と自分の興味が加わることではじめて出来上がるものだと思う。家族、特に母が私に与えてくれた刺激を私が受け取ってこられた証こそ、「私のまち」そのものなのだと感じる。だから、「私のまちを表す言葉」というのは、これまで自分が「私のまち」での経験から享受した言葉全てなのだ。その全ての中から、特に今の自分のはじまりになったであろう言葉を、私はここで思い出してみた。ちょうど、「東の空から昇るおひさま」のような言葉たちを。